

2014年度 春学期に向けて

巻頭言 **比較の学生に、なる** 比較文化学科長 伊東光浩
 — 基礎ゼミナール合同合宿について —

比較文化学科では、1泊2日の基礎ゼミ合同合宿を、学科の創設以来欠かさず続けています。本年度で13回目になりますが、その目的は、学生同士が、あるいは学生と教員が、ひとつ屋根の下に宿泊し、同じ食卓を囲むことを通して、友人を作り、担当の先生方とも、爾後の人間関係の核になるものを作り上げることにあります。世の中には経験を通してしか獲得されないものがあります。人と人との関係も、そうしたものの、ひとつでしょう。

私たちにとって、「人間関係」は多くの場合、未分化な表象です。その証拠に、それは言葉にすることが難しいし、思い込みや誤解も多いのです。ただし、それはまた、その場その場の状況の中で、表層的な《しぐさ》のニュアンスとして、それとなく（良きにつけ悪きにつけ）具現化されてしまうものでもあります。例えば、私たちが廊下ですれ違うとき、あるいは、授業でのやりとりの場で、時に心地よく、時に、突き刺さるような暴力的なニュアンスとして、感受されるのです。そうした「未分化な表象」のレベルから「(良き) 比較の学生」という自覚的な関係の表象を分化させること、それが合宿のコンセプトです。

新入生の皆さんは、新しい出会いを前に不安もたくさんあると思いますが、この合宿ですぐに新しい友人ができます。合同合宿には上級生も参加しますので、皆さんのたのもしいアドバイザーとなってくれることでしょう。

2013年度 基礎ゼミ合同合宿より



上郷・森の家



教員紹介



讚美歌斉唱



合宿の風景

▼
1
▲

ワールドスタディ

テーマ「自分の五感で、北京の過去と現在を体験しよう」

担当者より

本学科教員 鄧 捷

日中関係が冷え切ったなか、2013年9月6日から11日にかけて、12名の学生と一緒に北京へ行きました。渡航前の集中講義で北京について十分に勉強しましたが、多くの学生は、出発にあたって、やはり不安な気持ちを抱いていました。家族や知人に「気を付けて」、「反日だから日本人とはあまり名乗らない方がいい」と忠告され、身構える形で中国に入ったようです。

しかし、みんなの戸惑いと不安は、観光地を自らの足で回り、現地の人々と日本語を交えながら拙い中国語や英語で交流を図ろうとしているうちに、北京という街を楽しむ気分へと変わっていきました。私たちは極力タクシーや車を避け、地下鉄とバスと自分の足で北京を見て回ることにしました。以下、学生の研修後レポートを引用しながら北京滞在の様子を紹介します。

到着の翌日は、天安門広場、故宮、魯迅博物館を訪れました。学生たちは、天安門広場の観光客の多さ、帽子売りのパワフルなおばさんのしたたかさに驚き、故宮の広さと美しい建築物に圧倒されました。閑静な魯迅博物館では、「本人や家族の写真や阿Q正伝の手稿、さらに北京の伝統的建築様式である四合院で作られた魯迅の旧居なども見れ

て、授業で習ったことを記憶から掘り起しながらじっくり見学できました。」(須永さん)

この日は計画になかった胡同(民家と民家の間の細い路地)を通りました。この胡同歩きは、学生たちに深い印象を与えました。「コロギを販売し、その場

で鬮蟋(コロギを闘わせる中国古来の遊び)をさせ、そのことに夢中な男性たちをみて、この異様な雰囲気を実際に見てみなければ分からないものだと思われた。」(石渡さん)しかし、一歩大通りに出ると、近代的北京の街が広がっています。「中国という国はとても不思議な国でした。…通りをひとつ跨ぐと、時代はひとつ跨いで次の時代に進んだり、また戻ったりしたような、そんな錯覚に襲われることが多くありました。」(佐藤くん)

三日目は、北京郊外に広がる明十三陵と万里の長城。とくに万里の長城の雄大さは圧巻でした。「地平線まで砦が連なっているのが見え、その美しさと圧倒的なスケールの大きさ、そして今までテレビでしか見たことがない万里の長城を、自分が踏みしめているという事実だけに只々感動せずにはいられなかった。この巨大な建造物が秦の始皇帝の時から造られ、明代に再建されたものだととても信じられず、中国4千年の歴史の深さと強大さを肌で感じた瞬間であった。」(杉山くん)

四日目は、姉妹校「北京第二外国語学院」の





訪問です。日本語学院の学生たちと交流会を行い、昼食を共にし、図書館や同時通訳の授業を行う教室を見学しました。「日本語科の学生たちの積極的に日本を理解しようとするその姿勢に非常に感銘を受けた。…日本をもっと知りたい、歩み寄りたと言ってくれる学生がいることが本当に嬉しかった。たった数時間の交流で、私はこんな風に考えてくれる人もいるなら、日本と中国が抱えている問題はきっと良い方向に向かうのではないかと前向きに考えることができた。勝手なただの理想だが、日本と中国が互いに興味をもち互いの考えを理解しようとするそれだけで、お互いの国の印象は大きく変わるのではないだろうか。」(小杉さん)

五日目は、天壇公園です。故宮は皇帝の住まいであり、政治が執り行われる場であったのに対して、天壇は皇帝が豊作などを天に祈祷する場であります。青の屋根をいただく円形の建築物群は美しく、北京の青空に実に似合います。ここで地書を書く老人に出会いました。地面に水で見事に書かれた詩句をみていると、老人は私たちに気付き、「遠方客人」を書いて歓迎の意を示してくれました。この予想外の出来事に学生たちは感激しました。「中国の方にもこんなに温かい気持ちを持ってきているのだと嬉しさと切なさが込み上げてきました。領土問題や環境問題で日本では中国の人を誤解している人が多いから、実際にこの地を訪れて



気づくことがこんなにも沢山ある。」(須永さん)

最終日の午後は、自由活動時間です。いくつかのグループに分けて自力で移動・食事・買い物をするにしました。これは学生にとって本格的に中国を体験する始まりになったよう

す。うまく注文できないといった挫折もありながら、言葉が不自由な外国で何かをやり遂げる充実感を味わったものです。

六日間はあっという間でしたが、学生にとって「中国に対する悪い先入観を取り払ってくれた六日間」(杉山くん)でした。中国は「思っている以上に日本に近く、また、みながみな反日ではなく、思った以上に親日的であるということでした。くわえて、日本以上に街の、人々が活気に溢れているようにも思いました。列に並ぶことや、交通の面でのギャップ、違いを多く感じることもありました…」

(佐藤くん) 滞在中に2020年のオリンピックが東京で開催されることが決まり、「私たちが日本人だとわかると『2020年オリンピックだね』などと声をかけてくれる中国人や私たちのつたない中国語を何とか理解して笑ってくれる中国人も多くとても心が温かくなった。」(前田さん)

日々変化している北京という都市、そこに暮らしている中国の人々に触れたことを通じて、多くの学生はある確信のようなものを得たように感じます。最後に二人の学生の声を紹介しておきましょう。

「お互いに異文化理解につとめれば、日本と中国の未来は決して暗いものにはならないはずだと感じた。」(杉山くん)

「中国の人々の意識も変わってきている今、日本人の中国への印象の持ち方も変えていくべきである。そのために、マスメディアの報道に踊らされず、自分が見た、聞いたことを信じて周囲に伝えていくということが肝要であると考ええる。」(石渡さん)



2013年度 秋学期を振り返って

語学派遣留学：クイーンズランド大学

本学科3年生 K・S 君

2013年8月から12月まで4ヶ月間、オーストラリアにあるクイーンズランド大学に行ってきました。留学の一番の目的は、語学力の向上でした。英語が得意であったわけではありません。むしろできませんでした。しかしやはり英語ができるとかっこいいし、いろんな人とコミュニケーションがとれます。だから英語を少しでも上達させたくて行ってきました。しかし現実はその甘くはなかったんです。むこうに行って最初の1ヶ月はとても苦労しました。自分なりに少しは勉強をして留学に臨んだつもりだったのですが、最初のころは思うように英語が通じませんでした。学校では、他の国の人たちの英語のアクセントの違いに戸惑ったり、家では、ホストファミリーとの会話さえもともにできていなかったと思います。こんな感じで自分の英語力の乏しさに気付き、放課後は毎日勉強をしていました。また日本人によくありがちな英語を使うことの違和感、恥ずかし

さも最初のころは持っており、日本人の友だちとばかり一緒に過ごしていました。とにかく最初の1ヶ月は全部が大変でした。しかしそんな感じで過ごしていると、環境に慣れてきて、また心も落ち着いてきて、英語の失敗を恐れずに、いきいきするようになっていました。だんだん、天国のような素晴らしい生活を送っている気分を感じられてきました。帰国のころには、出会った友達やファミリー、そしてオーストラリアへの別れが惜しくてたまらないくらいでした。

この留学は、いろんなことに気づけたとてもいいものだったと感じています。日本を出ることで大きな世界を見ることもできましたし、日本では経験できないこともたくさん経験できました。英語も少しは上達しましたし、次のステップへ踏み出す力を蓄えることができたと感じています。みなさんもぜひ留学をしてください。

2013年度に比較文化学科では何名の学生が卒業論文を提出したでしょう？

本学科教員 井上 和人

3択にしましょう。①卒業生のおよそ1割。②卒業生の約半数。③卒業生ほぼ全員。わかりましたか？では、正解です。②卒業生の約半数、64名でした。この人数、どう見ますか。多い？少ない？「大したもんだ」と、私は思います。比較文化学科では、卒論は必修ではありません。にもかかわらず、約半数の諸君が卒論に挑戦し、達成しているのです。

卒論を書くのは大変です。まず、何ととっても長い。400字詰め原稿用紙にして80枚以上です。そのうえ、イベントがたくさんあります。①中間発表会の見学（3年次秋）→②卒論指導願提出（3年次12月）→③中間発表会（4年次秋）

→④卒論提出（4年次12月）→⑤口頭試問（4年次2月）。ほら、大変でしょう。避けて通りたいですね。でも、2013年度の場合、64名の諸君が提出した。途中までがんばったけれど、やむなく断念という諸君を加えれば、卒論挑戦者数はもっと増えます。「大したもんだ」と思いませんか。

とはいえ、不思議といえば不思議です。必修でもないのに、なぜ卒論に挑戦するのか。ゼミ生が言っていました。「調べたり書いたりするのが、やたら面白くなって」。そんなテーマに出会えば万々歳。けれども、口を開けて待っていたって、テーマは降って来ません。さあ、どうする？

ゼミナールの研修旅行：台湾の文化と歴史を学ぼう

本学科教員 鄧 捷

2014年2月28日から3月3日までゼミの4年生（2014年3月に卒業）と一緒に台湾の省都・台北へ行ってきました。現代中国関係の鄧ゼミの卒業研修旅行です。台湾といえば、日本は日清戦争後の1895年から1945年の敗戦まで植民統治を行ったところであり、1949年以後、内戦によって中国大陸と分断されてから独自に発展してきた地域です。共通語は中国と同じく北京語ですが、閩南（ミンナン）語などの方言も大切に使われています。

2月28日は戦後の国民党が民衆を弾圧した「二・二八事件」の記念日であるため、台湾は連休中にあり、台北の至る所が観光客でにぎわっていました。私たちは到着した当日に国立故宫博物院を見学し、国宝の「翡翠白菜」を堪能してから、縁結びの神様（中国語では「月下老人」という）が祭られている城隍廟で恋愛成就の祈りをしました。

二日目は風や雨が多い山間にある「九份」というロマンティックな佇まいの古い街を訪ねました。日本統治時代の台湾鉱業の拠点の一角に過ぎなかった無名の田舎町が、世界的に知られる映画『非情城市』により、瞬く間に著名観光スポットに生まれ変わったところ。素朴な味わいの建物や展望台から眺める海の景色が美しい。階段の細い路地に沿って構えられた数々の商店や茶館は、郷愁が漂っていました。

三日目は中華民国の初代大統領孫文を記念する「国父記念館」と、孫文の後を継いだ蒋介石を記念する「中正記念堂」を見学し、波瀾に満ちた中国大陸と台湾の近代史の一端に触れました。この日の夜、「台北101」という世界で三番目の高さを誇るビルの展望台にも上りました。

四日目は空港に向かうまでの時間を利用して「総統府」

を見学。総統府は日本統治時代の1919年に「台湾総督府」として建造された、赤レンガ、白い壁、アーチ型門、ギリシアの古典様式の柱を用いた建物です。年配の女性ガイドさんは流暢な日本語で案内してくれました。台湾はどのように日本の植民地になり、また、どのように中華民国の領土になったのか、小学校2年生まで日本統治下の教育を受けたガイドさんは、素朴な語りと自身の姿をもって、台湾の歴史をいきいきと、日本から来た現代の若者に伝えてい

ました。

あっという間の旅は非常に充実した内容でした。ゼミ生たちは毎日、電車やバスに乗り、地図を片手に台北という街を歩き回りました。疲れた体を癒してくれたのは美味しい台湾料理です。魚丸スープ、小籠包、魯肉飯、名前も知らない多くの果物……。お土産に台湾名産「鳳梨酥」（パイナップルケーキ）を携えて帰国の途に就きました。



国立故宮博物院



城隍廟で恋愛成就のお祈り



九份から眺める海



九份の茶芸館



国父孫文像と一緒に



台湾総統府

学院改革5カ年計画プロジェクト

アドヴェント展示

本学科教員 佐藤 茂樹

「アドヴェント展示」は、学院改革推進5カ年計画の一環として始まった催しで、今回で二回目になります。ヨーロッパのクリスマスは、キリスト誕生の12月25日から4週間さかのぼった日曜日から始まります。この期間をアドヴェント（待降節）と言いますが、この時期の様々な習俗を学生自身の制作品を通して知ってもらうのがこの試みです。今回は、クリッペ（キリストの生誕場面を表現した箱庭のようなものです）のミニチュア、レープクーヘン・ハウス（お菓子の家）、アドヴェント・克蘭ツ、アドヴェント・カレンダー、シュトレンなどを制作・展示しました。足を止めてその前で写真を撮ってくれる人も見かけられ、うれしい限りですが、これを機に自分たちの知っているクリスマスがかなり変則的なものであることを知り、比較文化的な関心を育むきっかけになってくれることを望んでいます。

また、この度は並行して「ワールドスタディ報告」の

ネル展示も行いました。



アドヴェント展示を囲んで。展示は佐藤茂樹ゼミナールが担当

第2回 金沢・鎌倉フォーラム 報告

本学科教員 富岡 幸一郎

2013年12月7日（土）に、金沢文庫キャンパス304教室で、「金沢・鎌倉フォーラム」の第2回目のシンポジウムを開催しました。テーマは、「地域と歩む」で今回は神奈川の文化・学術施設についての紹介と課題について、三名のゲストを学外からお招きしました。

鎌倉にある鍋木清方記念美術館の主任学芸員で副館長の宮崎徹氏、神奈川県立国際言語文化アカデミア教授で所長の三國隆志氏、そして県立金沢文庫の学芸課長である西岡芳文氏です。

鍋木清方は近代の日本画家で、泉鏡花や島崎藤村の小説の挿絵なども描いた人で、鎌倉にあった家を、今日小さな美術館にしています。宮崎さんには清方の絵の事や美術館の活動について色々と報告して頂きました。国際言語アカデミアはその名の通り神奈川・横浜に在住する外国人などへの開かれた学習の場を提供しています。比較文化学科ではグローバル時代の共生と異文化理解を学びの目標としているので、三國さんの横浜の文化と歴史を踏まえたお話は大変興味深いものがありました。最後に金沢文庫の西岡さんは、金沢文庫の歴史的な成り立ちを説明されながら、金

沢と鎌倉とのつながりを歴史文化的な視点からお話し下さいました。

ゲストの方々のお話を聞きながら、関東学院とりわけ金沢文庫キャンパスそのものが、金沢地区と鎌倉を結ぶ場所にあることを思わずにはいられませんでした。釜利谷の住民の方々や遠方からこのフォーラムに参加して頂いた聴衆の皆さんも、地域と大学のコラボレーションとしてのこのフォーラム（年に一回ですが）を楽しみにしているとのことです。学生諸君もぜひ積極的に参加してください。



鎌倉市鍋木清方記念美術館・宮崎徹副館長



神奈川県立国際言語文化アカデミア所長・三國隆志教授



神奈川県立金沢文庫・西岡芳文学芸課長

就活体験記



根之木 智美さん(2014年3月卒業)・・・就職先：株式会社 大分銀行

2008年のリーマンショックから高卒も大卒も就職が厳しいと言われた就活氷河期。景気が少しずつ良くなったとは言え、不安を感じながらも自分を信じ、祈り、乗り越えた就活でした。

九州出身の私は、就職を関東でするか、地元、大分県でするか決められず、時間だけが経ち、二月中頃まで両方同時進行で活動していました。40社ほどの説明会やセミナーに参加し、数をこなす就活をしていましたが上手くいかず、このような形に囚われた就活ではなく自分らしい就活をしよう、と思い切って背水の陣を敷き、的を絞って取り組みました。不安が全くなかった訳ではありません。しかし私には大学生生活で少しずつ少しずつ積み重ねてきたほんの少しの自信がありました。強みにしたものは①オックスフォード大学で過ごし、得たもの②慶應義塾外国語学校で得た英語のコミュニケーション力

③社交的で明るい性格と表現力の豊かさ、でした。面接では、自分の長所を引き出せるような、またその企業と繋がるような話の材料を用意しました。購読していた新聞から世の中の動きを見るなどして知識を得たり、企業研究の徹底、1年生から4年生まで続けたアルバイトの経験、そしてキャリアセンターの方にフォローしていただき、今まで私が生きてきて経験したこと全てと向き合い、それを生かしていく就活となりました。

就活を通して企業研究で社会を少しは知ることが出来たのはもちろん、自分を強く信じること、自分という人間を表現すること、キャリアセンターの方や離れた地から応援してくれた家族への感謝などを改めて学ぶことができました。私の就職活動は少し特殊だったので、参考にはし難いかもしれませんが、これから就職活動をする方、今必死に乗り越えようとしている方、自分のほんの少しの長所を大きな自信に変え、オリーブの校章をお守りに、胸をはってがんばってほしいと思います。心より応援しています。

樋口 俊君(2014年3月卒業)・・・就職先：さわやか信用金庫

私は地域社会や企業をお金の面から支えたいと考えていて、金融業界には就活がスタートする前から興味を持っていました。その中で「相互扶助」の精神の下、地域で集めたお金をその地域のために還元し、地域社会、企業の発展、繁栄に貢献できる信用金庫業界に出会い、「これだ」と感じました。

就活で特に心掛けたことは、「できることは何でもやる」ということです。面倒だから、大変そうだから、という理由で準備をせずに後悔するより、できることを全部やっておけば心残りなく面接に臨めますし、それだけの自信がつくからです。一人で行った支店訪問の日は本当に緊張しましたし、就活中は様々な苦勞を経験しました。しかしこうした経験があって今の自分があるのだと思います。

就活に対して「不安だな」と思う方はたくさんいらっしゃ

ると思います。でも心配しないでください。不安なのはみんな同じなんです。私もそうでした。中学校時代の恩師によく「人生は時の連続だ」と言われました。一人で乗り越える時もあるんですが、みんなで乗り越える時もあるんです。3年生と4年生のみなさんは「就活」という峠をみんなで乗り越える時期に来ています。一人で悩まず、まずは身近な人に相談してみてください。そして時には息抜きも必要です。私は息抜きの日を決めて遊んでいました。オンとオフの切り替えはとても大切です。みなさんも体調にはくれぐれも気をつけて、無事に就活という峠を乗り越えられるよう頑張ってください。



湯村 捺未さん(2014年3月卒業)・・・就職先：株式会社 城南村田

私は、製造業の技術職に就職します。友人に報告する度、「意外!」と驚かれました。文系のため全く経験がなく、就活を始めた頃は異なる職種を希望していたからだと思います。当初は、公務員を第一志望に考えていま

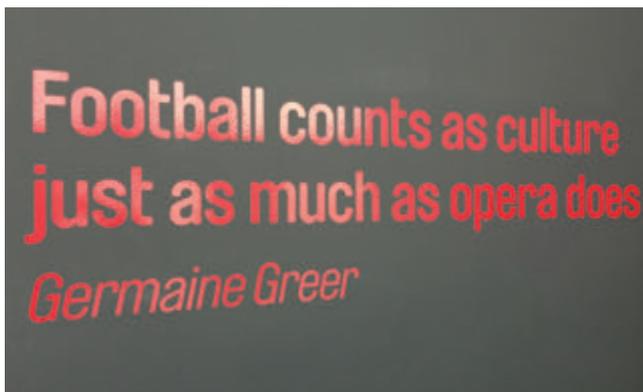
した。その勉強をしながら、事務職を中心として民間企業も活動していましたが、どちらも中途半端になってしまい、思うような結果は得られませんでした。

それでも活動を続けていた時に参加した企業説明会で、会社見学やお話を聞けば聞くほど、自らの手で物を生み出せる製造職に興味を魅かれました。知識も技術もないため、事務職は消極的な選択だったことに気が付きました。それ

から気持ちや考えを改め、未経験でも可能な製造や技術職での就活を再スタートし、内定を頂くことが出来ました。就活の準備は遅く、軸も定まっていませんでしたが、寄り道をした分、自分に合った仕事や企業を見付けられたのではないかと思います。

周囲が少しずつ内定をもらっていく中、焦りや不安で心はいつも折れそうでした。そんな時は、友人やキャリアカウンセラーの方にエントリーシートの添削から悩みまでなんでも相談しました。人に話して意見をもらうことで気持ちを整理し、笑顔で活動するよう心がけていたからです。就活は、上手くいくことばかりではありません。だからこそ、時には人に頼ることも大切です。自分のペースを保ちながら、興味を持てることがあれば、とにかく行動してみたいと思います。

教員研究紹介 「サッカーはオペラに匹敵する文化だ」



本学科教員 岡田 桂

で走ったり…。あえて言えば、これらの行為は何の役にも立ちません。実用性はゼロです。でも、実用性がないから価値がないかと言えば、そんなことはありません。現代社会において、スポーツは人々を熱狂させる現象であり、巨額のお金が動くビジネスの対象であり、時には国際的な交流の手段になったり、人々の憧れや人生の目標となることすらあるのです。

必ずしも役には立たない（実用性はない）が、あると生活や人生を豊かにする価値のあるもの——実はこれこそが「文化」の重要な側面であり、スポーツがこれほどまで世界に浸透した理由でもあります。私たちの日常は、スポーツに限らずさまざまな文化にあふれていますが、あまりに身近すぎて、あらためてその価値をとらえ直す機会は少ないかもしれません。しかし比較文化学科のみなさんには、4年間の学びを通じて、自分が興味を持った「文化」のエキスパートになって欲しいと期待しています。



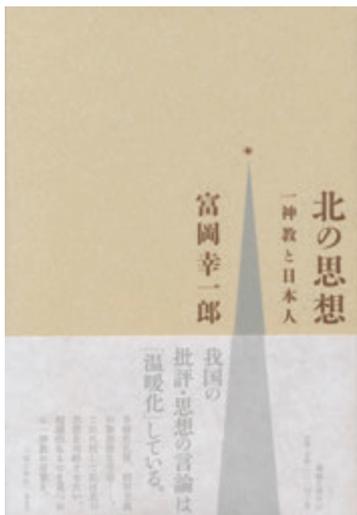
これは、2013年、在外研究期間に訪れたイギリスの国立サッカー博物館に掲げられていたことばです。みなさんは同意できるでしょうか？

私は身体に関する文化、中でも特に文化としてのスポーツを中心に研究しています。みなさんの多くは、部活や遊びでスポーツをプレイしたり、あるいはテレビやスタジアムでスポーツ観戦を楽しんだ経験があるはずですが、高校までの勉強では、スポーツや体育を「文化」として捉える機会はあまりなかったと思います。それでは、そもそも「文化」とは何なのでしょう。

あらためて考えてみると、スポーツとは不思議なものです。わざわざ手を使ってはいけないというルールを作って、脚だけでボールを相手のカゴに蹴り込んだり、細い棒で小さなボールを打ち返したり、はたまた100メートルを全速力

著書紹介 『北の思想——一神教と日本人』

本学科教員 富岡 幸一郎



2014年2月に関東学院大学人文科学研究所の出版助成をいただき『北の思想——一神教と日本人』（書籍工房早山）という本を上梓しました。近代日本の社会や思想に大きな影響を与えた、内村鑑三と新渡戸稲造のふたりのキリスト者を中心に論じた内容です。

本学の創立者である坂田祐先生も内村鑑三の信仰の影響をうけて、キリスト教の教育の先駆者となった方です。私自身もまた二十代後半に、内村の著作と出会い、キリスト教信仰に導かれたのです。本書の後半では西洋のキリスト教の思想家である、十八世紀のヨーハン・ゲオルク・ハーマンと十九世紀のキルケゴールを紹介してみました。一神教を、多神教・汎神論的な精神風土にある日本人が如何に受容したのか。そもそも一神教とは何なのか。「日本と欧米」「欧米文化論」そして総合講座「建学の精神を学ぶ」などの講義で語ってきたことでもあります。それにしても、明治期よりも現在の方が、キリスト教を偏見なしに学ぶことは難しいのです。

比較文化学科通信 Vol.19

2014年4月1日発行

編集：関東学院大学文学部比較文化学科

編集協力：関東学院大学文学部比較文化学科ゼミナール連合会

〒236-8502 横浜市金沢区釜利谷3-22-1 TEL:045(786)7179 URL:<http://www.univ.kanto-gakuin.ac.jp>

印刷所：株式会社なまためプリント 〒231-0006 横浜市中区南仲通4-43馬車道大津ビル TEL:045(641)8080